

低自尊心者の下方螺旋過程に対する友人関係の 進展段階の調整効果

長谷川 孝治（信州大学人文学部）

浦 光 博（広島大学大学院総合科学研究科）

前 田 和 寛（比治山大学短期大学部総合生活デザイン学科）

The moderate effect of stages of friendship on downward spiral processes among people with low self-esteem

Koji HASEGAWA (Faculty of Arts, Shinshu University)

Mitsuhiro URA (Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University)

Kazuhiro MAEDA (Department of Comprehensive Human Life
Studies, Hijiya University Junior College)

要 約

本研究では、低自尊心者における下方螺旋過程に対する友人関係の進展段階の調整効果が検討された。長谷川（2008）は、低自尊心者の下方螺旋過程の存在について明らかにした。すなわち、低自尊心者は、友人が本当に自分のことを大切に思ってくれているかどうかを繰り返し確認するという安心さがし行動をとり、その結果、その友人から拒絶されているという認知が高まる（肯定的に評価されているという認知が低下する）ことが示された。本研究では、このような不適応な相互作用プロセスは、低自尊心者が二者関係の進展段階を考慮していないために生じると予測し、検討を行った。パス解析による検討の結果、低自尊心者は、つきあいの浅い友人に対して安心さがしを行うほど、友人からの反動的自己評価が低下することが示された。また、親しい友人に対して、低自尊心者が安心さがしを行っても、反動的自己評価の低下は見られなかった。高自尊心者は、友人の親しさに関わらず、安心さがしを行うことが反動的自己評価を下げることはなかった。これらの結果について、アイデンティティー交渉の観点から考察された。

キーワード：自尊心，安心さがし，反動的自己評価，抑うつ傾向，友人関係の進展段階

問 題

Coyne (1976) の抑うつへの対人理論によると、抑うつ傾向の高い人は、対人関係の中で自己価値に対する不安を感じたとき、他者が本当に自分のことを大切に思ってくれているかどうかを恋人や友人といった重要他者に対して繰り返し確認するという安心さがし (reassurance seeking) 行動をとるとされる。このような頻繁な安心さがし行動が友人や恋人からの拒絶を引き起こし、結果として抑うつ状態が維持されるという下方螺旋 (downward spiral) 過程が存在するというのである (Joiner & Metalsky, 1995; Katz, Beach, & Joiner, 1998)。

長谷川 (2008) は、このような抑うつ者に見られる下方螺旋過程が、自尊心の低い人にも同様に認められるかどうかを検討した。その結果、自尊心が低い人においても、下方螺旋過程が見られることが示された。すなわち、自尊心の低い人が、親しい同性の友人に対して安心さがしをするほど、その人から肯定的に見られているという評価 (反映的自己評価) が低下することが示されたのである。反映的自己評価の低下は、友人から受け入れられず、拒絶されているという認知として捉えることができる。したがって、低自尊心者が繰り返し安心さがしを行うことで、友人はそれに答えるのが面倒になり、その様子を読み取った低自尊心者が拒絶されたと思い、反映的自己評価を低下させたと考えられる。

このように、長谷川 (2008) では、低自尊心者が安心さがしを行うことによって、対人的に、自ら不適応を生み出すプロセスが示されたといえる。このことは低自尊心が維持される要因として、安心さがし行動が重要な要因となっていることを示すものである。ただし、この知見において無視されるべきではない、もうひとつの興味深い点が指摘できる。それは、高自尊心者がとる安心さがしの適応性である。自尊心の高い人は、低自尊心者と同じように安心さがしを行っても、友人から拒絶されたと認知しなかったのである。なぜ、このような違いが見られるのか。

このような違いが生じた理由のひとつには、高自尊心者のポジティブ・イリュージョンが考えられるだろう。人は一般に自らを取り巻く世界をありのままに認知しているというよりも、自分の都合の良いように、ポジティブに歪めて捉えている (Taylor & Brown, 1998)。人はみな、平均的な他者よりも自分を少しポジティブに評定し (平均以上効果)、自分の周りに起こる出来事がある程度自分でコントロールできると感じ (統制感の幻想)、そして、自分の将来をバラ色に描き、生きている。このようなポジティブ・イリュージョンと呼ばれる認知傾向は特別なものではなく、人の一般的な特性であるとされる。さらに、このポジティブな認知の歪みは、人の適応を促進させ、精神的健康を実現させているとされる。このような傾向をより顕著に示すのが、自尊心の高い人である。自分に満足し、自信を持っている人は、特に、自己や世界に対するポジティブな見方をし、そのことが周りに対する積極的な関わりを促進し、それが実際に他者からのサポートを引き出し、さらに、それが自己のポジティブさを強化するという好循環が存在すると考えられる (Aspinwall & Taylor, 1992)。このような自信に満ちあふれた、自尊心の高い人でも、自己価値に対して少し不安になることもあるだろう。また、そんな時、彼ら／彼女らが、それを友人に対して安心さがしをする

形で確かめることもあるだろう。しかしながら、高自尊心者は、そのような安心さがしを行い、実際に相手がどのように反応しようと、一方的に自分は相手から受け入れられたとポジティブに認知し、その結果として、反映的自己評価が低下せず、維持されたという可能性も考えられる。

安心さがしは低自尊心者が行ったときのみ、他者からの拒絶認知を高める。そのもうひとつの理由として考えられるのが、友人関係の進展段階という要因である。二者関係の進展段階と自己開示内容の深さに関する古典的研究(Altman & Taylor, 1973)では、二者関係の初期においては比較的浅い内容の自己開示を行うことが適切であるとされている。逆に、関係の初期において深い内容の自己開示を行うことは、関係の進展を妨げると考えられる。深い内容の自己開示は、関係が進展した後に行われることが適切だとされる。このような知見に基づくと、先述した、なぜ低自尊心者が安心さがしを行うと他者から拒絶されるのかという問題について次のように考えることができる。すなわち、低自尊心者は、関係性の進展段階を考慮せずに安心さがし行動をとるため、そのことが他者からの拒絶を引き起こし、その結果、拒絶認知が高まるということである。低自尊心者は、友人がまだそれほど親密ではないと思っているにも関わらず、自分のことを大切に思ってくれているかどうかを確認する安心さがしを行ってしまい、その結果、他者から拒絶されるという可能性が考えられる。逆に、高自尊心者は、関係の進展段階に合わせる形で、適切に安心さがし行動を行っているために、他者から拒絶されないのかもしれない。高自尊心者は、相手との関係が親密になった場合に、はじめて安心さがしを行い、その結果、相手から受け入れられる可能性が考えられる。

本研究は、このふたつ目の理由として挙げた、友人関係の進展段階が、安心さがしから拒絶認知への過程を調整するプロセスについて検討することを目的とする。具体的には、長谷川(2008)の研究を発展させ、反映的自己評価の対象他者として、最も親しい友人とつきあいの浅い友人の2種類を設定し、低自尊心者と高自尊心者のそれぞれが安心さがしを行った結果、拒絶認知の指標としての、反映的自己評価がどのような影響を受けるかを検討する。このことによって、自尊心の低い人に顕著に見られる下方螺旋過程を調整する変数として、友人関係の進展段階を考慮する必要性が明確になると考える。

また、本研究では、低自尊心者の下方螺旋過程の後半部分についても検討対象として加える。つまり、自尊心の低い人が友人に対して安心さがし行動をとることで、拒絶され、反映的自己評価が低下するだけでなく、抑うつ傾向が高まるか否かについて検討する。このことによって、自己評価の低い人に顕著に見られる下方螺旋過程の全体像が明確になると考える。

以上の議論より、以下の仮説が導かれる。

仮説 低自尊心者が、つきあいの浅い友人に対して安心さがしを行う場合、反映的自己評価が低下し、抑うつ傾向が高まるだろう。

方 法

調査参加者と調査の概要

調査は、心理学の授業の終わりに集合一斉法で行われ、パネル・データを採取する目的で、

約2カ月の期間をあけて2回行われた。第1回調査は、2000年11月（以下、Time 1）、第2回調査（以下、Time 2）は、2001年1月に実施された。両調査時点ともに、ほぼ同様の質問紙に回答を求めた。後述する、反映的自己評価の2種類の対象を設定することで、友人関係の進展段階を操作した。Time 1で親しい友人条件の質問紙に回答した調査参加者は、Time 2にも同一条件の質問紙に回答した。つきあいの浅い友人条件の調査参加者についても同様である。この両条件のTime 1とTime 2とのマッチングは、調査参加者の学籍番号を用いて行った。両調査に参加し、後述する反映的自己評価の対象が変わらなかった145名（男性55名、女性90名）を分析対象とした。Time 1時点の平均年齢は19.15歳（SD=1.07）であった。

質問紙の構成（分析に用いた変数）

1) 自尊心

自己全体への評価を測る Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の邦訳版（山本・松井・山成, 1982）の10項目を用いた。回答は、各項目内容に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で評定させた。分析には10項目の合計得点を用いた。この得点が高いほど全体的な自己評価である自尊心が高いことを意味する。

2) 反映的自己評価

まず、調査参加者の友人関係を想起させるために、親しい友人条件では、親しいと思う同性の友人について、10人以内で、イニシャルを記入させた。次に、そこで挙げた人物のうち、「最も親しい同性の友人」を1人選び、想定を明確にするために、イニシャルを再度記入させた。

つきあいの浅い友人条件では、それほど親しくないと思っているつきあいの浅い同性の友人について、5人以内で、イニシャルを記入させた。ここで、深い関係性条件と比べて、想起させるイニシャルを少なくしたのは、つきあいの浅い友人はそれほど多く想定できないと考えたためである。次に、そこで、挙げた人物のうち、「一番、最近声を交わした人物」を選び、イニシャルを再度記入させた。

続いて、両条件ともに、想起させた1名の友人について、その人との親しさを「親しくない」～「非常に親しい」までの5件法で回答させた。

その後、各条件において、イニシャルを記入させた友人について、自尊心尺度の各項目を、友人からどう思われていると予想するかを問うものにワーディングし直した項目に対して、5件法で評定させた。分析には10項目の合計得点を用いた。この得点が高いほど、全体的な反映的自己評価が高く、逆にいえば、友人からの拒絶認知が低いことを示す。

なお、Time 2では、Time 1で想定させた友人たちのイニシャル（親しい友人条件では10名以内、つきあいの浅い友人条件では5名以内）と、上述のように各条件で選んだ1名の友人のイニシャルを、調査対象者ごとにコピーしたものを質問紙に貼り付けた。そして、再度、Time 1で記入した1名のイニシャルの友人を想起させ、Time 1と同じ項目について、回答を求めた。

Time 2の質問紙の最後に、今回の調査で思い浮かべた、評定の対象となった友人1名について、思い出すことができたかどうかについて、「a. 思い出すことができた」、「b. 思い出すことができなかった」ので、仕方なく他の人を想像して回答した」の2つの選択肢から

選んでもらった。この回答で、aと答えた人のみを分析対象とした。

3) 安心さがし

長谷川(2008)で作成された安心さがし尺度を用いた(9項目, 5件法)。Time 1, Time 2ともに、各項目の前の教示文で、反映的自己評価について評定する際、思い浮かべてもらった友人を再び思い浮かべてもらった。そして、その人から「あなたが自分自身について抱いているイメージ」と異なる評価を受けたとすると、どのような行動や反応をしようかを問う形式を用いた。具体的な項目は、「自分のことを心から気づかってくれているかどうか、相手に確かめる」、「相手が自分のことを本当に理解していないと思い、相手の気持ちを聞く」等であった。

項目分析の結果、「相手の真意を第三者に聞くことで、確かめようとする」という1項目を削除し、8項目の合計を安心さがし尺度として用いた。得点が高いほど、安心さがしをしようとする傾向が強いことを表す。

4) 抑うつ傾向

鈴木・青木・柳井(1989)によって開発された東大式自記健康調査票の抑うつ性尺度(10項目)を5件法に修正したものを用いた。分析には項目の合計得点を用いた。この得点が高いほど、抑うつ傾向が高いことを示す。

いずれの尺度も、Time 1とTime 2の両時点で測定された。

結果と考察

友人関係の進展段階の操作チェック

Time 1において、つきあいの浅い友人条件($M=2.49$, $SD=0.73$)よりも、親しい友人条件($M=4.34$, $SD=0.74$)の方が、有意に親しさ得点が高かった($t_{(141)}=15.06$, $p<.001$)。Time 2においても、つきあいの浅い友人条件($M=2.49$, $SD=0.84$)よりも、親しい友人条件($M=4.15$, $SD=0.82$)の方が、有意に親しさ得点が高かった($t_{(138)}=11.87$, $p<.001$)。以上の結果から、友人関係の進展段階に関する操作はうまくいっていたといえる。

各尺度の記述統計量と単純相関

Table 1に、全調査参加者における、本研究で用いた尺度間の相関係数と記述統計量を示した。尺度の信頼性については、いずれも概ね高い信頼性を示した。

尺度間の単純相関を見ると、Coyne(1976)の抑うつの対人理論と一致して、Time 1の抑うつと安心さがしとの間には弱いながらも有意な正の相関が見られたことが分かる。抑うつ傾向が高い人ほど、安心さがしを行おうとする傾向が強いことが示唆される。しかしながら、Time 2の抑うつと安心さがしとの間には有意な関連が見られなかった。

また、Time 1の自尊心と安心さがしとの間にも、弱い有意傾向の負の相関が見られた。自尊心が低い人ほど、安心さがしを行おうという傾向を持っていることが示唆された。また、抑うつの場合と同様に、Time 2の自尊心と安心さがしとの間の関連も見られなかった。

Table 1 諸変数間の相関と記述統計量

	Time 1				Time 2			
	自尊心	反動的 自己評価	安心さがし	抑うつ傾向	自尊心	反動的 自己評価	安心さがし	抑うつ傾向
Time 1								
自尊心	—							
反動的自己評価	0.57 **	—						
安心さがし	-0.16 †	-0.21 *	—					
抑うつ傾向	-0.63 **	-0.43 **	0.19 *	—				
Time 2								
自尊心	0.77 **	0.45 **	-0.07	-0.53 **	—			
反動的自己評価	0.52 **	0.62 **	-0.17 *	-0.36 **	0.61 **	—		
安心さがし	0.02	-0.02	0.56 **	0.02	0.05	-0.08	—	
抑うつ傾向	-0.46 **	-0.39 **	0.09	0.64 **	-0.63 **	-0.43 **	-0.05	—
Mean	31.57	35.31	16.50	25.98	32.47	35.87	16.11	25.31 **
S D	6.58	5.18	5.26	7.86	7.04	4.75	5.26	8.06
α	0.82	0.80	0.81	0.87	0.85	0.78	0.82	0.88

Note. $n=135$ (欠損値処理により, 10名が削除された)

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Time 1の安心さがしとTime 2の安心さがしとの間には, 有意な正の相関が見られた。安心さがしを行う傾向は, 通時的に安定していることが示された。

自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知と抑うつ傾向に及ぼす影響

仮説の検討のために, 友人関係の進展段階(親しい・つきあいの浅い)×自尊心(高・低)の4条件ごとに, パス解析を行った。つきあいの浅い友人条件の結果をFigure 1に示す。すべての変数間のパスを想定した分析を行ったが, 図中, 5%水準で有意なパス(実線の矢印)および10%水準で有意な傾向を示すパス(破線の矢印)のみを記載している。なお, 自尊心の低群と高群に関しては, Time 1の自尊心得点を中央値折半することで分類した。

Figure 1aを見ると, Time 1の安心さがしからTime 2の反動的自己評価への有意な負の影響過程が見られることが分かる。この結果から, 自尊心の低い人が, つきあいの浅い友人に対して安心さがしを行うことによって, 後の反動的自己評価を低下させることが示唆された。しかしながら, 低められた反動的自己評価が抑うつ傾向を高めるという関連性は見られなかった。これらの結果から, 仮説は一部支持されたといえる。すなわち, 低自尊心者が, つきあいの浅い友人に対して, 安心さがしを行うほど, その人からの評価が下がり, 拒絶されたと思うという下方螺旋過程の前半部分の存在が示された。低自尊心者は, 友人関係の進展段階を考慮せず, つきあいの浅い友人に対して安心さがしを行ってしまい, その結果, 拒絶されるということが示唆された。

さらに, 注目すべき結果は, Time 1の反動的自己評価がTime 2の安心さがしに対する影響過程が有意傾向を示したことである。この結果は, 低自尊心者は, つきあいの浅い友人から肯定的に評価されていると思うと, その人に対して安心さがしをするということを示している。低自尊心者は, つきあいが浅いにもかかわらず, その人からよく思われていると思うと, 深い自己呈示の一種とも考えられる安心さがしをしてしまうことが示唆される。この結果も, 低自尊心者が, 友人関係の進展段階に対応しない形で, 不適応な相互作用を行うことを示すものと考えられる。

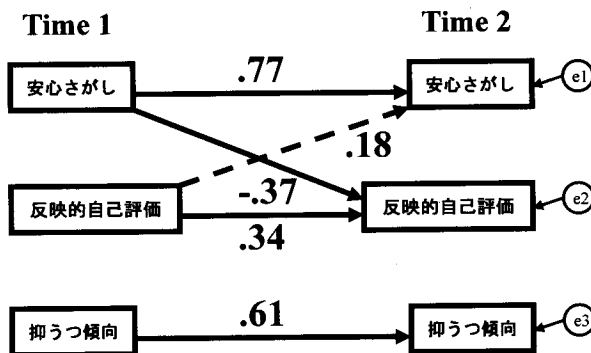


Figure 1a. つきあいの浅い友人・自尊心低群, $n = 36$

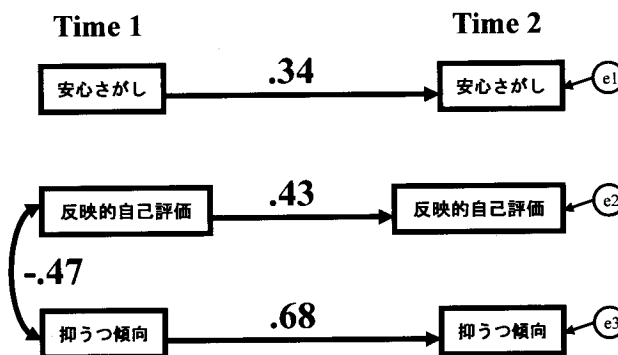


Figure 1b. つきあいの浅い友人・自尊心高群, $n = 38$

Figure 1. つきあいの浅い友人条件における安心さがし, 反映的自己評価, 抑うつ傾向の相互影響過程

これに対して、高自尊心者の結果 (Figure 1b) を見ると、Time 1 の変数から Time 2 の別の変数に対する有意なパスが全く見られないことが分かる。この結果は、長谷川 (2008) の結果と類似したものである。高自尊心者が安心さがしをしたとしても、反映的自己評価は下がることはないことが示された。さらに、Time 2 の抑うつ傾向についても、Time 1 の安心さがしや反映的自己評価から規定されることはなかった。

次に、親しい友人条件のパス解析の結果をFigure 2に示す。低自尊心者の結果 (Figure 2a) を見ると、Time 1 の反映的自己評価と安心さがしとの間に有意な負の関連がある傾向が見られることが分かる。低自尊心者は、親しい友人から肯定的に見られていないと思うほど、後の抑うつ傾向を高めることが示された。この結果は、低自尊心者が、親しい友人からの評価によって、精神的な健康を規定されるということを示唆するものである。この結果は、低自尊心者のアイデンティティー交渉に関する知見 (長谷川・浦, 1998) とも対応している。低自尊心者は、自己評価に関して自己と友人との評価のズレが低減されることによって、充実感や抑うつなどの精神的健康状態が規定されていた。また、低い自己評価に、友人の評価

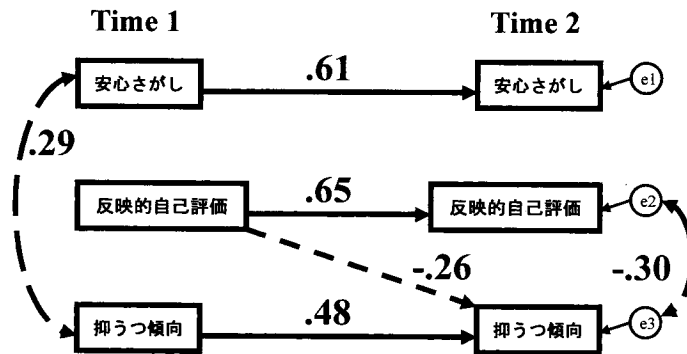
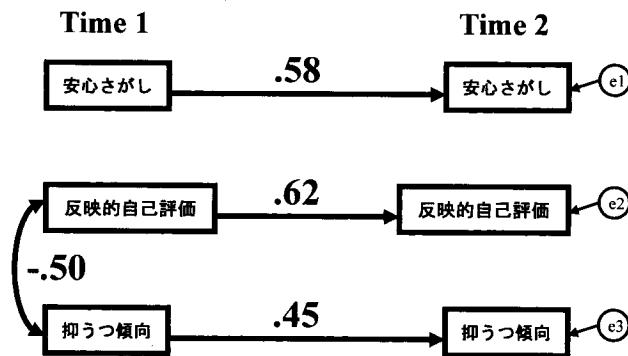
Figure 2a. 親しい友人・自尊心低群, $n = 37$ Figure 2b. 親しい友人・自尊心高群, $n = 33$

Figure 2. 親しい友人条件における安心さがし, 反映的自己評価, 抑うつ傾向の相互影響過程

を近づける形の交渉過程が見いだされた。このように、低自尊心者は、友人関係の状態によって、精神的健康が規定されることが示唆される。

また、低自尊心者において、Time 1の安心さがしがTime 2の反映的自己評価や抑うつ傾向に及ぼす影響過程は有意ではなかった。この結果は、低自尊心者でも関係性の進展段階に対応した形で、親しい友人に対して安心さがしをすれば、他者からの拒絶を引き起こさない可能性について示唆するものである。

これに対して、高自尊心者の結果 (Figure 2b) を見ると、Time 1の変数からTime 2の別の変数に対する有意なパスが全く見られず、つきあいの浅い友人に関する結果 (Figure 1b) と同様の結果が示されたことが分かる。高自尊心者が安心さがしをしたとしても、反映的自己評価は下がらないことが示された。さらに、Time 2の抑うつ傾向についても、Time 1の安心さがしや反映的自己評価から規定されることはなかった。この結果も、アイデンティティー交渉に関する知見 (長谷川・浦, 1998) と対応している。高自尊心者では、自己評価に関する自他の評価のズレが低減されたかどうかによって、精神的健康は影響を受けず、

自己評価と他者評価との相互影響過程も見られなかった。このように、高自尊心者は、友人関係の状態によって影響を受けず、自律的に適応を実現していることが示唆される。

以上の結果から、低自尊心者の友人関係の進展段階を考慮しない、不適応な相互作用の様相が明らかにされた。すなわち、低自尊心者は、友人関係がどのくらい親密かを考慮せず、つきあいの浅い友人に対して安心さがしを行うことによって、その人から拒絶され、反映的自己評価を低下させることが示された。また、低自尊心者でも、友人関係の進展段階に応じた形で、親しい友人に対して安心さがしをすることは、反映的自己評価を低下させないことも明らかになった。ただし、低自尊心者では、親しい友人からの反映的自己評価が低ければ、抑うつ傾向が高まるといふ友人からの評価に依存する適応プロセスが存在することが示された。高自尊心者は、このような安心さがしから拒絶認知や抑うつ傾向に及ぼす影響過程は見られなかった。

ま と め

本研究の結果、低自尊心者の下方螺旋過程が、友人関係の進展段階によって調整されることが明らかにされた。低自尊心者がつきあいの浅い友人に対して安心さがしを行うと、友人から拒絶され、反映的自己評価が低下することが示された。低自尊心者は友人関係の親密さを無視して、安心さがしを行い、その結果、友人から疎まれ、拒絶される可能性が示された。逆に、低自尊心者でも、親しい友人に対して安心さがしを行った場合には、反映的自己評価は低下しないことが示された。このような結果は、長谷川（2008）で見られた低自尊心者がとる安心さがしが反映的自己評価を低下させる過程が、友人との親密性の程度を考慮していない結果生じた可能性を示唆するものである。

しかしながら、ここでひとつ疑問点が残る。長谷川（2008）では安心さがしを行う相手として「最も親しいと思う同性の友人」を1人思い浮かべさせ、その人に対する安心さがし行動を評定させる形式をとっていた。本研究の親しい友人条件でも、同じように、「最も親しいと思う同性の友人」を1人思い浮かべさせて、評定を行った。なぜ、長谷川（2008）では親しい友人に対する安心さがし行動が反映的自己評価を低下させたのに、本研究では低下させなかったのか。考えられる理由のひとつは、本研究では、「最も親しいと思う同性の友人」を思い浮かべる前に、友人関係のネットワークを想定させていたことが考えられる。本研究では、まず親しいと思う同性の友人について、10人以内で想起させ、イニシャルを記入させていた。そして、その中から、最も親しい友人を思い浮かべさせていた。このような方法を採用することで、調査参加者は友人関係の全体像を把握することとなり、その中から一番親しい友人を選ぶことができたと考えられる。長谷川（2008）の方法よりも、本研究の方法の方が、より親しい友人を正確に想定させたのかもしれない。そのことによって、本研究では、低自尊心者が最も親しい友人に対して安心さがしを行っても、それを疎まらず、拒絶しなかったのかもしれない。また、もうひとつの理由は、調査参加者の人数の少なさである。本研究では、友人関係の進展段階（親しい・つきあいの浅い）×自尊心（高・低）の4条件に調査参加者を分けてパス解析を行ったため、各セルの人数が30名程度と少なかった。そのために、親しい友人に対する安心さがしが反映的自己評価を低下させる過程が有意なものとして検出され

なかったのかもしれない。これらの点について明らかにするために、調査参加者の人数を増やし、本研究と同様の検討を再度行う必要があると考える。

また、本研究では低自尊心者の下方螺旋過程の後半部分についても検討された。つまり、自尊心の低い人が友人に対して安心さがし行動をとることで、拒絶され、反動的自己評価が低下するだけでなく、抑うつ傾向が高まるか否かについて検討された。その結果、つきあいの浅い条件では、低自尊心者がとる安心さがしが反動的自己評価を低下させたが、抑うつ傾向を高めることはなかった。また、親しい友人条件では、Time 1の反動的自己評価の低さはTime 2の抑うつ傾向を高めていたが、Time 1の安心さがしがTime 2の反動的自己評価を低めてはいなかった。これらの結果は、自尊心の低い人が友人に対して安心さがしをし、拒絶され、反動的自己評価を低下させ、抑うつ傾向が高まるという一連のプロセスは必ずしも明確に存在するわけではないことを示唆するものである。親しい友人条件の低自尊心者に関する結果では、Time 1の安心さがしと抑うつ傾向との間に正の関連がある傾向が示されていることから推測されるように、友人に対して安心さがしをした結果、自己嫌悪に陥り、抑うつ傾向が高まるというようなプロセスが存在する可能性も考えられる。

最後に、本研究の限界としてあげられるのは、長谷川(2008)と同様に、他者からの実際の拒絶を測定していなかったことである。今後、ペア調査やペアでの実験室実験などによって、他者からの実際の拒絶を測定し、低自尊心者の下方螺旋過程の詳細について明らかにしていく必要がある。

引用文献

- Altman, I. & Taylor, D. A. (1973). *Social Penetration : The development of interpersonal relationships*. New York : Holt, Rinehart, & Winston.
- Aspinwall, L. G. & Taylor, S. E. (1992). Modeling cognitive adaptation : A longitudinal investigation of the impact of individual differences and coping on college adjustment and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 989-1003.
- Coyne, J. C. (1976). Toward an interactional description of depression. *Psychiatry*, **39**, 28-40.
- 長谷川孝治 (2008). 自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響 人文科学論集<人間情報学科編>, **42**, 53-65.
- 長谷川孝治・浦 光博 (1998). アイデンティティー交渉過程と精神的健康との関連についての検討 実験社会心理学研究, **38**, 151-163.
- Joiner, T. E., Jr., & Metalsky, G. I. (1995). A prospective test of an integrative interpersonal theory of depression : A naturalistic study of college roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 778-788.
- Katz, J., Beach, S. R. H., & Joiner, T. E., Jr. (1998). When does partner devaluation predict emotional distress? Prospective moderating effects of reassurance-seeking and self-esteem. *Personal Relationships*, **5**, 409-421.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being : A social psychological perspective

on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 211-222.

鈴木庄亮・青木繁伸・柳井晴夫 (1989). THI ハンドブック 東大式自記健康調査の進め方 篠原出版

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

(2008年10月31日受理, 11月18日掲載承認)